史料紹介

稲葉雍通「入邦記」

長谷川　冨美子

はじめに

「入邦記」は、豊前藩十一代藩主稲葉雍通（一七七四～一八四七）が、父弘通の名代として寛政九年（一七九七年）旧暦四月二十二日に江戸を発って五月十八日に国許へ帰郷するまでの旅日記である。雍通がこの旅で「入邦記」を著作したことは「稲葉家譜」[二]寛政九年に書かれているが、最近までその所在は明らかでなかった。一九九五年に先哲史料館新設開館にあたり、一括購入された「稲葉家文書」の中にこの日記が含まれていた。本記は全百三六頁で土佐日記及び和漢朗詠集の形式に擬したものと思われる（和漢朗詠集の写本が稲葉家に所蔵されていたことが知られている）[三]。当時の大名の文化的意識や、参勤交代の経路、国元、江戸屋敷との情報のやりとりなどを知る上で貴重な史料でもある。原文筆写は大分県立先哲史料館に納めたが、江戸時代にのみ用いられたお家流の特殊な変体仮名も混じっているため、ここに解読筆写を掲げる。

本　文

ことし寛政九ゝ卯月仲頃、國にかへりなんいとまを蒙り、おなし月末の二日[四]の日旅よそをひして、麻布の邸[五]を出立んずるに、つく〳〵おもひたまふるに東に出しより祖母君の御許をはしめ、あたらし稽上のやかた[六]にても、度々　御歌のえなん[七]とまかりて春は花、秋はもミちの御筵につらなり、ふつゝかなる三十一文字をつゝり侍るも、中々御芙蓉にも成けるに、こたひ旅ころもたちわかれんに馬のはなむけとて、ひかり有玉の言の葉敷しおくらせ給ひ[七]、何くれと名残おしけに御ほされて、みきなんとたふへさせられ、さま〳〵の御せこと侍るに御心の程出しはかられて泪もつとむやに[八]ふたかりぬ、故郷に帰なは誰も〳〵うれしきならひ成るを、かく七とせ余り東の方に住居しなれむつひ侍りけれは、爰も亦生れし國のよふにおもハれ侍りて、いと名残おしうおもひ給へれハかくなん

ふる郷を　出しはいつと　たとるまて　東のかたに　としを経て　春ハかすかの
山さくら　色香に心　染はてゝ　あかす見しるに　夏されハ　卯の花垣に
馴来つゝ　啼郭公　かへるさを　すゝむときけハ　たらちねの　なてこゝろを
いとゝ猶　おもふ恵の　露深き　秋にしなれは　さく萩の　花の錦の
袖はへて　たちかへる日を　待程に　神無月とや　ゆふ時雨　しくれ〳〵て
白雪の　つもる月日も　七とせに　早移り来て　旅ころも　おもひ立日ハ
こゝも亦　袖に泪も　せきかねて　おしむ別ハ　言の葉も　また残夜に
鳥かねの　暁告る　聲聞て　引いかゝねてふ[九]　名残をそ思　舞駒の　足もすゝます
武蔵鐙　かけ離ゆく　名残をそ思

反歌

七とせもなれておもへは旅ころも　たち帰るけふの名残やハなき
古郷に行はうれしきゐるひとも　けふはおもハぬ旅の別路

と詠してたち出けれと、住なれし東の方のミ、とにかくにおもひたされて、

行々も思ふなこりにいく度か　たちかへり見る東路の空

品川の驛にしハし休ひ侍りけれは、東の方より御側につかへ侍める人おこさせ、ゐふ席[一〇]とていろ〳〵御贈ものなと有けれハ、いと嬉しうおほへて

はる〳〵と心をよせしうら波に　立ワかれたるうさもしれき[一一]

なといひて、夫より鈴の森[一二]といへる所ゆき過る程、左の方安房上総の山見エて海原のみるめ、いと類ひなきけしき中々言の葉も出こす、ほひなくおもひながら仁に行過ぬ、同し夜ハ程ヶ谷の宿にとまり侍りぬ

宿かりて寝ぬるほとかやうき旅を　慰む苔の枕[一三]とハせん

廿三日[一四]ハ、雨あハたゝしく降りけれと、猶はる〳〵の旅路なれは、同じ駅に又泊り侍らんも行すえ覚束なくおもひ、つとめてあまつゝみ[一五]して程ヶ谷の宿を出立ぬ、うきたひのかきりいはんかたなし、夫より戸塚藤澤をへて南郷にいたり、かれ飯たうへなんとし休ひぬ、程近き所に馬乳[一六]といえる河[一七]あり、終日西風いたくふき降ければ、かの地の川もやかてわたりとゝむへう、舟長のうたへけれは[一八]、実おやミなき雨のさも有ぬへしと下ッ人々に至るまて、得しも休ミもやらす[一九]、いちあしを出して馬乳の川に到けれと、水かさ増りて波高く殊更風も烈しくて最早船のかよひもとゝまる由なれは、心くるしうも思ひながら船の事なれハ心にまかせす又々駕をかへし南郷の駅に暫くやすらひ、藤沢の宿まて立帰るへしとおもひ歩行下ッ人を藤沢まて先に返しけるか、かの地の本のやとハ、さわる事[二〇]有りけるよしにて、側の寺中に宿を定め、漸く日くるゝころおひ其寺につきける、駕の内たにかく苦しきをなへての歩ゆく人々いかならんと、おもひやられて袖もぬれそひぬ、入相の聲を聞て入相の鐘の聲さへうちしめり　ゆふへ淋しき雨のふる寺

一夜こゝにかり寝し侍りて、あくる廿四日[二一]つとめて起居つゝ今もや馬入のわたり許してんと、かの所より申おこすを、待程千とせも経[二二]ぬるなと口すさむもとふ〳〵しさおもひやるへし、せんすへなきまゝつくりなせりける庭なんと見廻りけるに、躑躅又ハ手まりことやらんいへりける花なんと、いとよく開きけれは、我獨見んもあたら花[二三]とおもひ、いさゝかなから東の

方に送り奉らんと、あたりの人々へ紙につゝませて其上にかひ附侍る

おもひやる心をたれに岩躑躅[二四]　いはむかたなき花の盛も

盛なる色をし君に見せはやと　おもひつきたる手鞠子の花[二五]

巳の刻はかりに此寺をたち出ける、けふは空も霽けるか、昨ふの雨にて路いとあしく、下ッ人々うきたひのつかれいか斗と、よそならすおもひて、今日も猶草木の雫に袖はほしあへす、松原のはる〳〵と遠き所に到けるに、駕脇の人旅のうさなくさめてんとや、さま〳〵ものかたりなとして行に、まつの木の間より雪の降つもりて白く高き山みへけれハ冨士かとふ、是なんそれといひけれは、よめる

たち並ふまつの木の間を待得つゝ　折々むかふ雪のふしのね

と口すさミて、又きのふやすらひける南郷の宿にしハし立寄て、さて馬乳川を渡りける、昨ふにハ川つらのさま碧り波も閑に風もなきて、すゝしけなるそらにふしもいとよく見ェ侍りぬ

名高きも空にしられて山といふ　山を藍に見する富士のね

いつも〳〵たハ折歌のミなから、只に旅のうさをはらさんため読りけるとて、大磯にて昼飯なんとし侍り、梅澤にしハし休らひけれとうたもいて来す、他に過行ぬ、黄昏のころにしなれは、いとゝたひのつらさも増り小田原の駅にからふしてつきぬ、明る廿五日[二六]寝ての朝、気ハ又々きのふに替り雨そほふりけれと、暁のころ小田原の駅を出立て函根路にかゝりける、なを〳〵雨つよく降りしきり、いはん方もなき、物うきたひ路也、三枚橋[二七]といへる所に到りける時、夜もやう〳〵と明はなれ、四方山霧立籠て、行すえの道そことしも分す、覚束なさいか斗かは、道の側に躑躅のみいと盛りに開きけるを見侍りて、是も東の方にさゝけんと雨にしほれておりてける

箱ね山ゆく〳〵道の手つさひに　おり〳〵躑躅の花としれかし

と詠しゆく程猶霧はれやらす、谷川のなかるゝ音いとそふ〳〵しう覚ェ侍りけれは、しハしの程かの橋に休らひて、から

歌作り侍りける

函開関路杳難攀　細雨濛濛山更閑
三葉橋頭留駕望　千尋流水落松間

湯本に小休し、それよりはたといふ所に休らひける、高き山なれは夏なからまた風さむけにふきたり

こへ来れは風はた寒き箱根やま　嶺には雪や猶残るらん

と読て、はこねの宿につきける、雨の名残にや霧立籠て霎も深けれハ名高きふしもみェす

風寒四月嶺如冬　定識三峯六出濃
白日冥冥湖水暗　炯霊何處玉芙蓉

おなし所の庭の西を見侍りけるに、椿の花の開きけれは是も東の方に捧んと、例のおしはなにし侍りける

おりとるもすゝろ言葉の玉椿　すへの八千代を花に契りて

いたゝきより少しおりたちて、宋関寺といへるてらに休らひけるか、山ふきの花春に替らす開侍りける、卯月末まてもか

くやまふきの盛成ハ所からにやといひあへりける、是も亦東にさゝけんとて

山吹も君が為にし折とるは　おしともいはぬ色に社さけ

珎らしうかの寺の僧なんとゝ、暫くもの語し侍りけれは酒なと贈り、おもひもかけすたひのうさもしハしか程ハわすれし

に似り、はこね路をやう〳〵とこへ過て三嶋の駅につきぬ、此ところの社は河野の氏神なりけれは、昨ふよりものいみなと

してもふて侍りける、夏深く木々の老葉も生茂り、神さひ増り、昔時の事なとおもひ出していと貴し

もふて来て仰き三嶋の神社　氏の栄へを猶守れかし

黄昏のころ沼津の駅にいたり一夜のかり寝し侍りぬ、同廿六日卯の刻過る頃沼津の駅を立いてゝ、原といへる所にしハし

か程たち休らひ、夫ゟ柏原まてはる〳〵の松はらをゆく程に、夜もやふ〳〵明放れ雨もいさゝかおやミ、冨士のたゝすまひ

いと間近く見ェ侍るに、傍の人をもてこゝハ何てふところそと問ハせけれハ、爰はうき嶋か原とそこたふ

冨士のねをそなたに見つゝ行程は　なくさむ旅のうき嶋か原

やふ〳〵と柏原に到りぬ、庭なんとそこかしこ見廻りけるに、夕顔の巻数多さきみたれ、にはも所せきまて見ェ侍りてお

もしろかりけれハ

此宿にとひ寄てこそ盛なる　い呂をも見つれ花の夕顔

巳ノ刻ハかりよし原に至りかれ飯なとし侍りて、出立頃は雨もやミ、空の気色もはれ渡り、長路をゆく〳〵も自心なくさ

ミ、夫ゟふし川にいたりて

高ねにはまた雪とけぬほとなれや　わたるも浅きふしの川なミ

岩渕にしハし休らひけるに、かの宿の主いろ〳〵けふしあひてもてなしけれハ、旅のうさもいさゝかわすられていとうれ

し、夫ゟ蒲原にいたり薩田に駕をとゝめて、さゝなんととふへける席に、此山は何といへる山そと主にとハせけれハ、今ハ

薩田山とのミ言ひ侍れと、いにしへハいはき山といひしそ、といふを聞てよめる

尋来てとハすは誰かいはき山　ありしその名も今ハ替れる

実にも山のたゝすまひ、おと呂〳〵しく見ェおかしきさま也、やふ〳〵と越行て爽津川をわたりける、袖しの浦を過る時

はる〳〵と見るめからましたひ人の　そてしの浦の波の夕暮

申の刻はかりに興津の宿につきて其夜はそこに旅寝し侍りぬ、明る廿七日寅ノ刻過るころ立出んとおもふおりから、清見

寺の鐘の聲を聞て

起出て路いそけとや清見寺　あかつき告る鐘響らん

と詠し行程、天の戸も出し明方にて海の面静かなり、向にたてる三保の松原、明るにつけて漸と見え行気色、けに絵画る

さま也

又るひなみの見るめもほの〳〵と　雲にわかるゝ三保の松原[五八]

江尻[五九]にいたり、しハし駕をとゝめける、それより小吉田[六〇]といへる所に至りても亦そのさま也、巳ノ刻ころ阿部川[六一]を渡りけるか、此ころ空もいとよく晴、川水も常よりハかれ〳〵に見へ渡となん、おりしも側に木々のいと茂りける有、所の人に問ハせけれハ、木枯の森[六二]といふとしいへハ

夏にいましける若葉もあるものを　何木からしの森といふらん

午の刻過る頃鞠子の駅[六三]につき、かれ飯なとし侍りける、傍に其家の児ともうちむれて遊ひけるを見て

わらハとち春の名残のあそひとて　つくやまりこの印成らん[六四]

宇津の山[六五]を越行ほと、実にも山のたゝすまひうつすとも、絵師も及ばぬ程のけしきいとおもしろけなれは、夢にも人になと詠ぜまた踏もミぬ道を今　こすはうつゝの宇つの山路[六六]

と獨こちて

蔦の細道[六七]をへて岡部[六八]に近つきける時、

夏深く茂る若葉をふみ分て　岡部にかゝる蔦の細道

岡部にしハし駕をとゝめ、申の刻斗り藤枝[六九]に着ぬ、庭の梱東にさゝけんとて

染出ん秋ならましを蔦かつら　しける若葉のう津の山越

茂りあひて夏ハ夫とも若楓　ましること木も同し緑りニ

明る廿八日[七〇]酉の刻前、藤枝を立出て嶋田[七一]のかたにゆけハ、河原なんと有て、はる〳〵の道なるか漸と行つきて大井川に到り見るに川も浅くてわたりよかりける、川の面見渡してから歌作りける

砂明水碧栖舎炯　満里長流接海天

御洗芙蓉千仞影　飛波卷雪大井川[七二]

菊川[七三]に小休し侍りて

秋ならハ花に色香もそへて見む　今は名のミそ菊川の里

佐よの中山[七四]を越侍る時

行々もくれなはこゝに旅ねして　明日やこえなん小夜の中山

日坂[七五]に到りかれいひし侍りて、それより掛川[七六]、原川[七七]、袋井[七八]を経て日暮るころ見附[七九]につきぬ、同しく廿九日[八〇]見附を夜深く出立て、一里はかりも行ハ夜も明方に成ける、折ふし池田[八一]てふ処に至りける時水難の啼を聞く

里の名の池田の水に所得て　なくや水難の雲の寂しさ

夫より天竜河[八二]を渡り濱松[八三]に小休し侍りぬ

立よりてしハし休らふ里の名の　はま松かへのかけそすゝしき

又篠原[八四]に駕を暫しとゝめける

いとゝ猶うきふししけき篠原や　分ゆく道も末はるかにて

荒井[八五]の海に到りけるか、昨日迄ハ風もあはたゝしくふきけれと、けふはいか成事にや波風も、しつまりける

常住に吹はあらひのしほ風[八六]も　けふハなミ路をわたる静けさ

傍に濱名の橋[八七]有しよし聞侍りて

波かくる濱名の橋のはし柱　たちし其名ハ今も朽せぬ

おなし處高師[八八]の山を越行に、鄙公のなくをきゝて

催いく重ゆふこへ来れハ鄙より　なく音高師の山鄙公

なと口すさミて日斜なる頃白須賀[八九]の宿に着ぬ、昼の間のうさをわすれん為側に侍ふべしと、さゝなんとたふへける席に読

る、此所いにしへしかすかの駅[九一]といふよし聞て

酌酒の酔のまきれやしかすかに　ひなの長路のうさもおもはす

明る五月朔日白須賀をたち出て、二河[九二]より田[九四]をへて、それより小堺[九五]に行道に柳橋[九六]といへる所有りけれは

くるしくもふみしそ渡れ橋の名の　柳のいとの長き旅路に

御油[九七]にいたりかれ飯し侍りて、法然寺といへる處に鶴をとゝめて見るに、むかへる山夏木立生茂りておかしく見ェけれハ、名ところにやと人にとハせけれハ、是なん二村山[九八]といひける、折ふし高ねに雲のかゝりけるをみ侍りて

ふりいてんあめもしられて此ゆふへ　ふたむら山にかゝる白雲

それより藤川[九九]に小休ミし黄昏のころ岡崎[一〇〇]につきぬ、明る二日暁のころ、旅をたちて大濱茶屋[一〇一]に小休ミし、又池鯉鮒[一〇二]に到りても行末遠き旅路なれは、下ッ人々の労をも補ハん為鶴をとゝめ、かれ飯なとてふして鳴海[一〇三]のかたに近つく、道の側に幾元の墓あり、むかしの事おもひ出し袖をしほりぬ、こしの句[一〇四]の今川の字をつゝけて歌読侍りける

誉あるその名斗ハこゝに今　かハらす人の来てやとふらん

それよりなるミにいたりて

日数へて馴し東の山端も　みえす鳴海の道そはるけき

此わたりに松屋の里[一〇五]といへる所ありけるよし聞て

朝な夕なたらすもふくかよそに聞　名さへすゝしき松風の里

かくよみて宮[一〇六]につきぬ、おなじく二日宮より船にのりて海路を行に、側に侍ふ人々といろ〳〵ものかたりしあへり、こゝろにかなふ追手にて、舟長もこよなふよろこひ侍りけるよしきゝて

のま崎[一〇七]やをより吹て舟長の　心にかなふ真帆の浦風

午の刻過るころ漸〳〵と桑名[一〇八]にいたり、それより富田[一〇九]に到り、申の刻前四日市[一一〇]の宿につきぬ、同四日[一一一]ご市[一一二]をいてゝ、なし所追分[一一三]に休ミ、又ゆく道のかたはらに海水谷[一一四]といへる処あるを

そことしも見ェす木深き谷蔭に　清水なかるゝ音の淋しさ

広野に小休し、それより泉川のわたりを通りけるに、かはおとかすかにきこへていとものすごきたひ路也、東林にいたり又鶴を止メ、関[一一五]に到りかれ飯なんとし侍りぬ、この関といへるはいにしへ鈴鹿のせき[一一六]有し処成るよし、所の人のいひけれはいにしへの鈴鹿の関の跡ふりて　いまは名のミそこゝにとまれる

是よりハ山つたひなり、筆捨山[一一七]といへる山にて

古への絵しも及ハて今さらに　ふてすて山の名を残しけん

さか下[一一八]に至り鈴鹿山[一一九]をこへける時よめる

ゆくさきにたか乗駒のすゝか山　声斗りしてすごき木かくれ

猪の鼻茶屋[一二〇]に至りしハしやすらひ、巻にもやふ〳〵成ける時、土山[一二一]の宿に着ぬ、庭にをひけるしのふ草をとりて東に捧けんとて読る

草の名に類へてもしれ朝な夕な　君しのふてふ心有とは

同し所にて渡辺恭忠の郭公の啼を聞てそら歌作りけるとて見せけれハ、其韻を和して遣しける

土山猶上月西傾　回望杜鵑何處鳴

莫恨壁壁頭破夢　却教作賦慰鄉情

又席に

夢覚てそれかときくもきゝわかす　なくはいつちの山郭公

おなしく五日土山を出て大野茶屋[一二二]に行ける間にまつの尾の神いましける、其わたりの川を松の尾川[一二三]と云へるよしきゝ侍りて

水底に常盤のかけを移しとや　まつの尾川の名に流れけん

水口を出て田川に到り昼のかれ飯てふしけるに、庭の藤の花いと元ならすさき満りけるを見て

藤かつらくるしき旅のならハしも　むらさき深き花におもハす

詠めつゝふしのしなひの長き日に　まかせて末の道もいそかし

見る〳〵も猶盛りしとなりけれは、又東の方にさゝけんとてよめる

見せはやとおもふ心はさく藤の　いろより深き花の下蔭

石部に休ミ、梅の木に鶯をとめて庭のわたりそこかしこ見廻り侍りけるに、作りなせる山水のけしき心有さまなり、立ならふ木々もこと〳〵しくつくりなして見所あり

梅の木や花さく春ハいかならん　なつも若葉の風そ匂へる

それより草津の駅につきけるに、けふハ五月の端とて家々菖蒲なんとかりふきいはゐけるなんとをゝて

いとゝ猶露こそむすへ折にあふ　菖蒲の草のかり枕して

菖蒲草引離れたるふる郷も　東のかたもけふ祝ふらし

同六日暁のころ草津の駅をいてたちて行に、夜もよふ〳〵明方になり、松原のたえ間〳〵近江の湖のわたり雲霧のさはりもなく見ゝ、そこかしこ名ある所なんと人々に問侍りて、けにいひしらぬ気色かなと、そのところのありさまを口すさむと

そ、野路の玉川を見て

秋か花さかぬ緑のいろさへも　たくひハなつの野路の玉河

と詠し行うち、道のわたりに月の輪の池といふ所有りけれハ

さゝ波のよるの詠やいかならん　水もくもらぬ月の輪の池

瀬田のはしに渡りかゝれハ夜もはや明はなれて、湖のけしきいふも更也

真帆引て行はいつくかしらま弓　矢橋の沖の海士の釣舟

同し所にて唐うた作りける

彩虹遥掛淡津東　地勢崔嵬眺望中

城上穿林高閣出　風前入霧去帆空

一群鷗鳥驚舟起　千項波濤觸石進

多少騒人題八詠　湖山勝景興無窮

又左り之方を見やれハ、石山の木々のこふかきたゝすまひまことにおとろ〳〵しくいはんかたなきけしきなれと、けふは伏見にてかれこれ動もの事多けれハ、向よらん事得しもならさりけれハ、ほひなくおもひなからよそに見て過ぬ

間近もとふ事かたき石山や　いそく旅路に心せかれて

かた〳〵辛崎の方見渡して

さゝなミもまつの風も音たへて　ながめ静けき志賀の辛崎

三井寺にて

蕭蕭園城路　蹈穢遠欲尋

山連烟霧絶　風送雨花深

落日沈湖水　晩鐘覆寶林

回頭清浄地　頓洗世中心

数々拙なき事のミいひつつけて大津の駅につきぬ、逢坂の関路を過て又々追分に鞭をとゝめ、かの所にておもハすも古郷よりの消息にあり、是までは別し東のことのミ何くれとおもひ出られけるに、今消息なと見侍りていと縁しう、誠にうき旅も忘れ古郷にはやも帰りたるこゝ地する、是もふる郷の方近く成りたる故にや有らんと覚ゆ、勧修寺谷に又々鞭をいこへ、藤の森によふ〳〵と到、下ゝ人々も長の旅路の事なれはいと労たしおもひ、やゝ久しく休ミ侍りて、ふし見にて勤させりけ

る人の許に安を向ん為まかり、それより伏見の邸に着ぬ、久々の旅路なれハたひのつかれ一方ならす侍りて、三十一文字も得つゝけ侍らすその夜は他に明しぬ、同七日いろ〳〵の勤事なんとしおへて都の方にまかり上り侍らんと、あけ六ツ時過より屋しきを出立て、鳥羽街道をへて行に、首洗の池秋の山なんとを見て、小枝沖を渡り、恋塚、実相寺にまかり、松永貞徳あしの丸屋旧跡なと見て、それより千本通をへて四条の茶屋に暫く小休ミし、桂河をわたり松の尾の社にまふて来て祈置けふより千代の栄をや　なをまつの尾の神に任せん

おなし所の卯花をとりて東の方に挿んとて、

うつ木垣君か千年の末遠く　掛て祈し花のしらゆふ

と詠し、それより虚空蔵といへる寺にまかりて

寺の名の虚き空やこゝにいま　すミける人の心成らん

嵐山に到り山の木立なんといひしらす、麓にハ名にしおふ大井川、渡月橋なと見渡す、いと珍らしう名所もかつ〳〵有ものから、詠はこゝに尽せりとおもふ斗也、誠や尋来すハ、かく類ひなきけしき、しらて社やみぬへけれと、うれしうおもひ、人傳に聞しハ此山の麓也けりと、見おとりもし侍らす、しはし傍の家にやすらひ、昼かれ飯して拙なき歌ともよゝ侍らんと思ひ給ふるに、此景眺にけおされてうたも出こすなりぬ、しかハあれと他に過行ん事を余りほひなくおもひて

春秋は又いかならん花紅葉　なつもあらしの山はあかれす

大舌川を見て

すゝしさのあかぬなかめの大舌川　世にも類ひは波のおはしま

おなし所、名にしおふもゝち又は嶋巡なむと有けれは、とりて是も東に挿んとてかくなん

嵐山秋ともいはすみとりにも　あかぬ梧の木々のもみち葉

夕日さす嵐の山の岩つゝし　みせはや朱の花の盛りを

かくして又唐うた作りける

欲問嵯峨夏日晴　桂川一帯水流清
逐涼緩歩洛西路　乗興壮遊河朔情
大豕汀邊多氣色　天龍雲裏送鐘聲
帰途過莫斜陽没　渡月橋頭有月明

小倉嶺上夏雲長　為愛風光對夕陽
自自王孫分百詠　到今猶有古山荘

なとゝ獨こゝちせし程ニ、雨雲の空かき曇り侍れと、是より他にかへらんも名残りおしうおもひ、天龍寺にまふてけれは、同しわたりに芹川てふ河あり、是はいにしへ御幸せし所なんめるよし、ところの人のもの語し侍るをきゝて

御幸せし其代ハいつと芹川に　たれもとひよる水のしら波

芹川やすへの世までも流れ来て　有し御幸の名こそ絶せね

野の宮にまふて、かのわたりの山中を経行に、おりしも夏の事なんめれは木々の若葉生茂れり

夏木立若葉しけりて行程の　道もおくらの山の下かけ

と詠して、小倉山の麓二尊寺てふ寺に暫し立休らひ、定家殿すみ給ひし時雨の亭といへる所にとひ寄、古をしたひて、とある木蔭に休ふ、おりしも雨そほふり、いにしへ時雨の亭といへる事おもひつらぬて

いにしへのうたな尋てとひ寄れは　夏も時雨の名にそふりぬる

いと名残おしうもおもひけれと、ゆふつけて雨もふりしきりけれは、こゝかしこ見残して行に、側に名社の瀧の古跡あれと、いさゝかそれとも見えぬ瀧なれハ

昔時に愛し瀬とて其名こそ　なかれて今の世に残りけれ

大澤の池[二〇七]を遠なから見侍りしに、菖蒲草みとりに生茂るさまなれは

此里はかる人なしやいたつらに　あやめもわかすおふ澤の池[二〇八]

嵯峨野[二〇九]をゆくに道の下に大なる池有、此池は何といへるそと、路しるへの人にとハせけれハ、是なん廣澤の池[二一〇]といひけり、

おりしも風吹て涼しかりけれは

吹ほとは波のうき草かたよりて　なを廣澤の池の夕風

手世のふる路[二一一]を通るとて

緑そふ苔のむしろにおりしきて　昔を思ふ千代の古道

なんといひて御室の御所[二一二]にまかりける、雨いとつよく降て猶とひ寄て見まほしきなところも多かりけれと、下ッ人々の雨にぬれ〳〵て労たく見ェけれは、只懇の為に人くるしめてんも、心なきさまなりと、是より早くふしミのやかたにと急ぬ、はる〳〵の路なりけれは、朱雀[二一三]といへる所に、しハし休らひ、夜ェ入、戌の刻[二一四]過るころ漸伏見に帰りける、おなしく八日昼の飯なとして、大坂の方に下らんとおもひ立ける、昨日も都の方にまふのほり[二一五]侍り、いさゝか足やすむる間もあらす、この里ハたゝかりの宿りなれと、かくて今別とおもへハ、これも名残おしうおもひて

たひ枕一夜ふしミの里にさへ　又来んまての名残やハなき

と詠し、川舟に乗り淀川を行に、河上のさまいとよく見ェ、中ころにもなれは、おなし所の城なと見ェ、きしねにハ水車なと、あかて実におもしろふ社ハ覚ゆれ、傍の人ェなとゝさゝなんとたふへ、流れにまかせつゝ下りける時よめる

けふハ又昨日の旅のうき瀬をも　わすれて下す淀の川船

水車を見て

年波の流もたえぬみつくるま　めくり来て見ん淀の川舟

日も暮ゆきて同し所に泊りぬ、いとおもしろきさま也、から歌作りける

解纜扁舟発伏陽[二一七]　両岸満樹夏條長

荻園洲畔群蛍點[二一八]　楊柳枝間宿鷺翔

處處名山供彩筆　澄澄流水濯金觴

瀑河行盡推窓望　月波玉江橋上光

萬里反流瀑水涓[二一九]　無涯勝景坐来移

舟師不待詩思熟　直任風波過暫時

おなしく九日[二二〇]、大坂の館に着ぬ、その夜は事しけく侍れは記さす、おなしく十日[二二一]大坂の館を出て、あち川[二二二]といへる湊にいたり、沖船より元船に移りけるか、あきなひする舟なと、あちこちとたへ間なく行かよひける、さこそや此世をうみ渡る業[二二三]ならんを、よそ目には中々なくさめとも成りぬ、といひあへるも心なく社ハ覚ゆれ、しかのミならす所から四方の山のたゝつまひ実に絵かけるさま也、さハ何なれと急なる身なれはうたも出こす他に日たけぬ[二二四]、舟ッ人々も何くれといとなミ多けれは、今宵は爰に泊りぬ、同十一日[二二五]も亦おなしさま也

三津天満月清園　楊柳垂枝夜繫船

武庫山臨淡島起　摩耶雲擁金城懸

諸邦商船連燈火　両岸高楼響管絃

始識繁華堪此地　乗槎賞詠不能眠

同十二日[二二六]やふ〳〵と舟よそをひとゝのひけるよし、船長の方より申をこし、暁ころから櫓の聲、喧まてきをひて舟出しけるに、にはもよく海風穏にて、尼崎西宮[二二七]の浦に朝霧立籠、けに殊成見るめなり、いくたの沖[二二八]にて

真帆にふけふくにまかせて幾千里　いくたの沖の船の追風

二度山といへる山を見やりて、過し七年のむかしをおもふに、我故郷を出て此地を通り、久しく東の旅やかたにまかりて、こたひ勅のいとまを蒙り、めつらしう故郷にかへり、山の名の二度又此わたりを通り、かくて今見るも亦二度成りけり、と思ふまゝに

行帰る船路うれしくけふ爰に　ふたゝひそれとむかふ山端

なとして、須磨の浦辺を行に、所からわきて見るめも殊なり、中々筆も取あへす、絃に寄居て

よせこすハ波こゝもとのけしきをも　しらてやすきん浦の真砂地

おなしうら伝ひして行に、明石の沖にて

他に見る人はあらしな藻しほ草　かく弥らしき須磨や明石を

播州蒼海望悠哉　蘭槳回旋赤浦隈

壮観愧将詩賦拙　揮毫欲擬本華才

又

播海回舟淡島東　天晴浪暖興無窮

猶餘昔日歌仙趣　一片孤帆入霧中

午ひつしの方淡路の沖を見れは、蜑の釣する舟と覚ェて、こゝかしこさしうかへ、其身にさこそ釣のいとなき業ならんを、

よその見る目もあハれなりけれハ

蜑人のつりする舟もゆきかよふ　波にうかへる淡路しま山

一の谷を見て

當昔殺気此鵯盧　最憐漢家李廣勲

敵上閃風黄鳥旆　海中漂浪赤羅櫓

草深戦地埋枯骨　苔滑幽渓留古墳

陳跡探来多少客　英名徧説飛将軍

藤ッかた絵しまの傍に舟よせ待れは、夕日影うつろひて、はへあるさま也

船よせてかゝる見るめはうつすとも　あしも絵しまの夕日さす影

今宵は此湊に泊りぬ、おなしく十三日暁ころ舟出して、たつの沖を漕行に西風いとあわたゝしく吹降けれは、霧も深くて

しま山もみえす、千里の沖行心地していと心細し、舟長もさこそ心もとなく思ひ侍るらんと覚ゆ、巳の刻はかり、からふしてうし窓の湊に到りつきて、其夜は爰に泊りける

降音に夢もくたけて雨の夜ハ　なをうし窓のうらの苫船

咫尺涙濃曲浦傍　維船風雨客愁長

篷窓一夜篠満響　不使夢魂到故郷

又

船人維纜雨濛濛　嵩嶼崔嵬鬼海色雄

回棹今宵犯牛渚　探珠何處訪龍宮

西南不并波濤上　咫尺難分雲霧中

休道天涯千里外　風潮直與故郷通

明る十四日とらの刻、うしまとを出んとて、舟よそおひしけるか、此日も猶昨日の余波にや雨折々ふりしきりけれと、行末遠き船路なれは、苫引掩ひ、しひて漕行に、はと遠き事なれハ舟人共いたふつかれけるよし舟長より申出し、しはしか程下ッひといへる所に纜をほときて、雨のはるゝをも待過ハ、しほの満来るを考へ何くれとする内、雨もをゝ風もほとよく

ふきて、追手なれは、さらは早々漕出てんと、かの湊をいそき出立、白石のわたりを行に、めつらしき嶋山のたゝすまひ、いはほの姿得もいひしらぬけしきともいはゝや、かくもいはゝや、とおもふものから、気色にやおされけん、腐大和いつれのうたも出こす、徒にすへして戌の刻弓削に錠おろしぬ

いかり綱かゝるくしきうき寝さへ　なれてはさしもおもハさりけり

一夜はここに明して、おなしく十五日朝の間は又昨日のさまにて雨いとつよくふり、しほ時もいまた舟長の心に叶ハねは、同し湊にかゝり居けるか、巳の刻時分漸くしほもかなひけれハ、そほ降雨いとひなく同し所を漕出しける、此日は風もいと静にて帆をも掛す、終日漕ゆくまゝ、かこ共なれし樂なから、日を経し船路なれはろふたけにて、よそなから心くるしうおもひて船長にものし、速くもまいらせす、御手洗の湊に入て、日高き頃をひより、うき寝の床を定ぬ

波まくら立帰る菅を御手洗や　ふる郷近きみなととひ来て

同しく十六日とにかく雨ふりけれと、御手洗を船出していつき灘を通りける、浦々の磯の気色を見るに、そこかしこさかしき岩のたゝすまひ、あかぬ見るめなれと、船とく過てうたも出こす、他に詠て高濱につきぬ、明る十七日東雲のそらしらみ、礒山ほのくらき頃、舟よそおひして高濱の泊りを別ぬ、しハらくして出し方をかへり見るに波斗也

泊舟今におもへハ朝ほらけ　出し湊は跡のしら波

長濱といへる所にて

礒山をそこと見しより行程も　なを長はまの浦そはるけき

又硫黄灘にて

船よせむ湊も見えぬ海原ハ　波のいつくやかきりならまし

一片揚帆碧海隅　滄茫更自客心孤

崩雲接水千雷激　駭浪欲天萬馬趨

風起灘頭飛鷺首　潮来巖下伏蟠蛟

回看故國知何處　徒倚蓬窓疑有無

ひつしの刻過る頃、佐志生になん帰り着侍りぬ、今朝まてハいつくや國のさかひなといひしに、早も我国につきぬとて、よろこひのゝしりける、程なく城より使なとおこし給ひ、明る十八日には船あかりし侍るとて、いとなゝ事も多けれハ、筆とるいとまも待す、同十八日卯の刻斗佐志生より船出し侍りて、殿ケはへを過る時城の見えけれは

神山記得酉蓬瀛　且喜江風飛鶴輕

王母千年總不老　到家先欲問長生

おなし時洲崎の前にて凌虚亭を見て、たわむれにて詩作りける

西海大鵬乘海分　帰飛萬里自無群

看吾高有凌虚志　直入金鑑亭上雲

帰り来ておもへは出し七とせの　むかしもけふに近きふる郷

註

（一）稲葉家譜　寛政九年丁巳
　四月十八日始賜代父婚于聞杵之休暇　将軍家斉公賜紗綾五巻白銀二十枚　大納言家慶公亦賜紗綾□巻二十二日発江戸五月六日到伏見九日
　到大坂十八日着臼杵雅通常野詩及和歌毎歴名勝地著作頗多矣稲為巻　廻日入邦記畧不載于此　船到于堀川総部迺蔵及老臣蒔士小士　代官
　以下出懲門番所側　倘徙坊長里長等出迎船場而雅通歩入二丸諸士俱従之既而諸士列大書院告初帰于臼杵之賀雅通出見之
（二）高橋長一「臼杵物語」に「天文二年無射吉日書之　一九才の時のもので書体も若く朱線など引いて、丁寧に学んだあとがわかる。上下二
　巻を合本してある。如何にも一鉄の愛読した本と思われる」とみえる。
（三）おなし月末の二日：寛政九年四月二十二日（陽暦五月十八日）。
（四）麻布の邸：稲葉家の江戸下屋敷。
（五）あたらし橋上のやかた：新橋にあった稲葉家の江戸上屋敷。
（六）御歌のえ：和歌の寮。
（七）ひ可り有玉能言の葉敷しおくらせ：光りある玉の言葉許し贈らせ。和歌の免許皆伝あるいは古今伝授が示唆されている。
（八）邯とむ弥耳：つとむやに
（九）引い加ゑてふ：ひきいかいちょう。引き返居ちょう（引き返している）の意か。
（一〇）東の方：雅通はこの年江戸で婚礼をおこなっており、温故年表録　寛政九年丁巳に「二月十一日伊予守雅通公聞婚礼御録女京後久留米
　城主有馬中務大輔従四位少将頼貴侯第女栄女君ナリ」の記述がある。従って東の方は栄女君をさす。
（一一）ゐふ席：夕席か。夕宿なら二十四節気の小満を祝ったものと思われる。
（一二）鮎の森：鮎が森（刑場のあったところ）。
（一三）苦の枕：旅行用枕
（一四）廿三日：四月二十三日（陽暦五月十九日）。
（一五）あまつゝみ：雨包みか。雨具を兼用しての意。
（一六）馬乳といえる河：馬入川（相模川）。馬入川の名は源頼朝が裾野と範頼の亡霊を見て気を失い、驚いた馬と共に飛び込んだことに因む。
（一七）うたへけれは：訴えければ。
（一八）実おやみなき：「まことに小止みなき」。
（一九）いちあし：逸足。
（二〇）さはる：障る。他藩が既に宿っていた可能性がある。あるいは当時は逆戻りすることを凶としたためか。
（二一）廿四日：四月二十四日：陽暦五月二十日。
（二二）待程平とせも：千年を経た松と、長く待つをかけている。
（二三）とふ〳〵しき：不咲。「遠々しき」か。
（二四）あたら花：惜ら花。勿体ない花の意。
（二五）岩：言うをかけている。
（二六）おもひつきたる手鞠子の花：「思い付く」と「鞠を突く」をかけている。
（二七）他：あだ。
（二八）廿五日：四月二十五日：陽暦五月二十一日。
（二九）三枚橋：箱根町湯本にあり、早川にかかる橋。
（三〇）しほれて：萎れて。
（三一）三葉橋：三枚橋を指す。
（三二）はた：畑宿（はたじゅく）。湯本と箱根関の中間にある。

(三三) はた寒き：感動詞「はた」に地名「畑」をかけている。
(三四) 六出：りくしゅつ。結晶の形から、雪の意。
(三五) 湖水：芦ノ湖。
(三六) 芙蓉：玉は美称。芙蓉は富士の異名。芙蓉は蓮の花。山容が蓮花に似ることから。
(三七) 玉椿：荘子の大椿に由来し、長寿の象徴として歌に用いられる。「上古有大椿者、以八千歳為春、以八千歳為秋。」（荘子逍遥遊）
(三八) 宋関寺：静岡県三島市山中新田の山中城跡三の丸跡にある寺。天正十八年（一五九〇年）北条方の松田康長以下四千名が山中城に籠り、豊臣秀次の七万の兵を迎え撃って破れた。元和二年（一六一六年）康長らの菩提を弔うため宋関寺が建立された。箱根山西麓標高五八〇メートルにあり、箱根峠（標高八四九メートル）から下った位置にある。
(三九) 社：こそ（強めの助詞）。
(四〇) 称：珍。
(四一) 河野の氏神：伊予州越智郡の大山祇（姫）の神。稲葉家の祖は伊予の名族河野氏である。
(四二) 仰き：「仰ぎ」と「青き」をかけている。
(四三) 廿六日：陽暦五月二十二日。
(四四) 原（静岡県沼津市原）。
(四五) うき嶋が原：歌枕（沼津市原）うき嶋：「浮島」に「憂き」をかける。「いつとなき思ひは富士の煙にて起き伏す床や浮島が原」（西行山家集）
(四六) 柏原：静岡県浜名郡新居町
(四七) よし原：静岡県富士市吉原。
(四八) 岩淵：現地名不詳。

(四九) 蒲原：静岡県庵原郡蒲原町。
(五〇) 藤田：旧磐城山。
(五一) いはき山：磐城山。歌枕。「磐城山直越え来ませ磯崎のこぬみの浜に我立ち待たむ」（万葉集）
(五二) 袖しの浦：袖師浦。出雲の袖師浦は歌枕として有名であるが、この袖師浦には古跡はないといわれる。
(五三) みるめ：海藻（海松）と見る目をかける。「みるめかるかたやいづくぞ棹さしてわれに教へよ海人の釣舟」（源平　新古今）。
(五四) 興津：興津（静岡県清水市興津中町）。
(五五) 廿七日：陽暦五月二十三日。
(五六) 清見寺：巨福山清見興国禅寺求玉院。白鳳時代の開山とされる古刹。名僧で知られた。
(五七) 三保の松原：歌枕。
(五八) 又るひ：待たるる日。
(五九) 江尻：静岡県清水市江尻町。
(六〇) 小吉田：現地名不詳。
(六一) 阿部川：安部川。静岡市西部を流れる。
(六二) 木枯の森：古枯社。歌枕。安部川上流にある。「消え侘びぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの杜の下露」（定家　新古今集）。
(六三) 鞠子の駅：歌枕。丸子とも書く。「とろろ汁」で有名。
(六四) つくやまりこ：「鞠を突く」と「鞠子の宿に着く」をかけている。到着したときに大名行列の前で子供が鞠をついていたとは考えられず、フィクションであろう。
(六五) 字津の山：歌枕。
(六六) 夢にさへまた絶もミぬ峯を今　こすはうつゝの字つの山路：「駿河なる字津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」（業平）

の本歌取り。要（東の方）から文（手紙）が夢の中でさえ届かないということを読み込んでいる。

（六七）篤の細道：歌枕。「都にも今や衣をうつの山　ゆふ霧はらふたの下道」（定家　新古今）

（六八）岡部：静岡県志太郡岡部町。

（六九）藤枝：静岡県藤枝市藤枝。この宿場の名物は「瀬戸の染飯」と呼ばれた、くちなしの実で染めた黄色いおこわ。雍通は黄色く染めた飯が好物であった。一説には大友宗麟時代に伝来したバエリアであるとされているが疑問である。

（七〇）ましること木：混じる異木。

（七一）廿八日：陽暦五月二十四日。

（七二）嶋田：静岡県島田市本通り。

（七三）大井川：大井川。島田市西部を流れる。

（七四）宿川：歌枕。「いにしへもかゝるためしをきく川の　同じ流に身をゆ沈めむ」（俊基朝臣　太平記）。

（七五）佐夜の中山：歌枕。「年たけてまたこゆべきと思ひきやいのちなりけりさ夜の中山」（西行　新古今）。

（七六）日坂：静岡県掛川市日坂。

（七七）掛川：静岡県掛川市掛川。

（七八）原川：逢川。腹川と背川があり、腹川村と背川村があった。

（七九）袋井：静岡県袋井市袋井。

（八〇）見附：静岡県磐田市見付。

（八一）廿九日：陽暦五月二十五日。

（八二）池田邑：かって天竜川西岸、江戸時代には東岸にあった宿場。

（八三）天竜河：天竜川。

（八四）舞坂：静岡県浜松市。

（八五）篠原：静岡県浜名郡篠原町。

（八六）荒井：静岡県浜名郡新居町。

（八七）あらひのしは風：荒井と荒いの掛詞。荒井は現静岡県浜名郡新居町。

（八八）猿名の橋：歌枕。荒井宿の南にあった橋の古蹟。焼失した（年代不明）と伝えられる。「水の上の浜名の橋も焼けにけり打ちけつ浪やよりこざむけり」（重之歌集）。

（八九）高師の山：歌枕。荒井と白須賀の間、往還より北の山を指す。「雲のゐる峰はるかに霧こめてたかしの山に鶯ぞ啼くなる」（実明　金槐和歌集）

（九〇）白須賀：静岡県浜名郡白須賀。

（九一）しかすかの駅：然菅の渡（歌枕）。「松かげのいり海かけて白菅のみなと別れて出づるふな人」（九条前内大臣　統古今集）

（九二）五月朔日：陽暦五月三十六日。

（九三）二河：二川。

（九四）よし田：吉田。愛知県豊橋市。

（九五）小坪：現地名不詳。

（九六）柳橋：現地名不詳。

（九七）御油：愛知県豊川市御油町。

（九八）二村山：歌枕。「出でながら雲にかくるる月かげをかさねて待つや二むらの山」（西行　山家集）

（九九）藤川：愛知県岡崎市藤川町。

（一〇〇）岡崎：愛知県岡崎市康生町。

（一〇一）二日・陽暦五月二十七日。
（一●二）大濱茶屋・不詳。
（一〇三）池鯉鮒・ちりゅう（知立）。歌枕。伊勢物語で有名な八橋古跡は近くである。「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞおもふと詠めりければ、みな人かれ飯のうえに、涙おとして濕びにけり」。この故事にちなんで「かれ飯など調し」たものと思われる。
（一〇四）鳴海・名古屋市緑区鳴海町。
（一〇五）鈴元の墓・今川鈴元が桶狭の近習・服部小平太に脇腹を突かれ、毛利新助に首を取られた場所。
（一●六）こしの句・腰の句。和歌の第三句。ここでは今川の「今」と「川」を第三句と第四句に分けて詠んだことを指す。
（一〇七）松風の里・歌枕。現名古屋市鳴海付近。「待つ」と「松」をかけている。「松風の里にむれゐるまな鶴は千とせかさぬる心地こそすれ」（定家）
（一〇八）宮・名古屋市熱田区。当時は桑名との間に「七里の渡」があったが、現在は陸となっている。
（一〇九）三日・陽暦五月二十八日。
（一一〇）のま崎・不詳。知多半島に野間という地名があるが、「七里の渡」の舟上から遠望できたとは思われない。現在陸となった部分にあった地名であろう。
（一一一）桑名・三重県桑名市。
（一一二）富田・三重県四日市市東富田。
（一一三）四日市・三重県四日市市。
（一一四）四日・陽暦五月二十九日。
（一一五）こ市・此市。四日市を指す。
（一一六）追分・伊勢神宮へ向かう道との分岐点。
（一一七）清水谷、広野、泉川、栗林・不詳。これらの地名は現在使われていない。
（一一八）関・三重県鈴鹿郡関町。
（一一九）鈴鹿の関・三重県鈴鹿郡関にあった古関。
（一二〇）筆捨山・歌枕。狩野古法眼がこの山を描こうとして果たせず、筆を捨てた故事に因む。
（一二一）さか下・坂下。三重県鈴鹿郡関町坂下。
（一二二）鈴鹿山・歌枕。
（一二三）猪の鼻茶屋・滋賀県甲賀郡土山町猪鼻にあったと考えられる茶屋。
（一二四）土山・滋賀県甲賀郡。歌枕。
（一二五）渡辺恭忠・入部記に登場する唯一の実在人名。家臣らしいが不詳。
（一二六）杜鵑（とけん）・ホトトギス。
（一二七）五日・陽暦五月二十日。
（一二八）大野茶屋・不詳。
（一二九）松のを川・松尾川（滋賀県甲賀郡）。歌枕。「君が代の千とせの色に染でにけり松の小川の水の春まで」（光広卿）
（一三〇）水口・滋賀県甲賀郡水口町。
（一三一）田川・現地名不詳。「近江名所図会」には「田川」として、「小川あり。横田川西の岸なり」との記述がある。
（一三二）いと元ならす・「もとなに咲を乱れけるを見て」の意か。
（一三三）藤かつらくるしき旅・岩にからむ藤かずらに絡りすがりながら行く苦しい旅。
（一三四）石部・滋賀県甲賀郡石部町。

（一三五）草津：滋賀県草津市草津。
（一三六）五月の節：端午の節句。五節句の一。菖蒲を軒にさし、邪気を払った。
（一三七）菖蒲なんとかりふき：菖蒲なんど、刈り葺き。
（一三八）折にあふ：折句うか。
（一三九）六日：陽暦五月三十一日。
（一四〇）近江の湖：琵琶湖。
（一四一）野路の玉川：歌枕。六玉川の一つ。「明日もこむ野路の玉川萩越えて色ある波に月やどりけり」（俊頼朝臣、千載集）。
（一四二）月の輪の池：月輪の池。滋賀県大津市。
（一四三）瀬田のはし：瀬田の唐橋の古跡。
（一四四）矢橋：滋賀県近江国栗太郡老上村（現草津市）矢橋（やばせ）の湖岸を矢橋の浦という。
（一四五）淡津：琵琶湖の湊。ここでは矢橋の渡口を指す。
（一四六）城：園城（長等山園城寺＝三井寺）。
（一四七）高閣：三井寺の八詠楼。近江八景全体を見渡せる眺望物として有名であった。相国寺林長老の漢詩近江八景に唐風高閣出塵城と見える。
（一四八）騒人：文人、詩人。楚の屈原の「離騒」に出来。
（一四九）八詠：遠望する八詠楼に掛ける。
（一五〇）石山：石山寺。紫式部ゆかりの古刹。
（一五一）伏見：京都伏見。白梅湾の京屋敷があった。
（一五二）辛崎：滋賀大津。志賀の辛崎。次の和歌は「ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」（柿本人麿、万葉集）の本歌取り。
（一五三）蓊鬱（おううつ）：草木の盛んに茂るさま。雲や霧が盛んに立ちこめるさま。ここでは後者。
（一五四）園城：長等山園城寺＝三井寺。天智天皇の発願。祇園精舎に擬せられた。これが後段の世中心の連想になっているらしい。
（一五五）晩鐘：三井の晩鐘。
（一五六）青林：極楽浄土の七宝からなる樹林。
（一五七）清浄地：清浄土（仏智によって清められた国土）。ここでは三井寺境内を指す。
（一五八）大津の駅：滋賀県大津市大津。
（一五九）逢坂の関：古関。歌枕。
（一六〇）古郷よりの消息。臼杵より大阪、伏見屋敷を経て届けられた書状。伏見屋敷から迎えがここまで出たことが分かる。御会所日記寛政九年四月二十四日に「江戸ゟ書状箱右之御船ニ両通候　大坂江茂淀伏右出伏箱大坂着候ハヽ御用状之分道中七日限切・・・」とあり、この書状を受け取ったものと思われる。
（一六一）勧修寺谷：京都市山科区にある勧修寺付近の谷。近江から伏見への街道が通っていた。
（一六二）藤の森：京都市伏見区にある藤森神社を指す。
（一六三）勧勧させりける：勧められていた。
（一六四）安を問ん為：「安を問わん為」ノ意カ。
（一六五）七日：陽暦六月一日。
（一六六）あけ六ヶ時：午前6時頃。
（一六七）鳥羽街道：京都市南区と伏見区にまたがる地域にある道。
（一六八）首洗の池：網ねられた頭を洗った故事で名付けられた池。京都には複数存在する。平重衡の首洗池が有名だが、木津町にあり位置的

に離れている。

（一六九）秋の山：鳥羽の景勝地。白川上皇が鳥羽離宮を造営し、鳥羽上皇や歴代天皇が行幸した。後に鳥羽伏見の戦いの戦場となった。

（一七〇）小枝神：鴨川の現在の中島小枝橋の付近にあった渡しか。

（一七一）恋塚：京都鳥羽にある袈裟御前の墓。

（一七二）実相寺：実相院。京都市左京区岩倉にある古刹。智証大師円珍の開山。皇族や貴族が出家入山した。

（一七三）松永貞徳：安土桃山～江戸時代初期の歌人、俳人、歌学者。

（一七四）あしの丸屋旧跡：蓋の丸屋は「葦で葺いた小屋」の意だが、ここでは実相寺境内にある松永貞徳翁閑居跡を指す。「夕されば角田の稲葉おとずれて葦のまろ屋に秋風ぞ吹く」（大納言経信）。

（一七五）千本通：京都市の南北通りの一つ。朱雀大路を含む。

（一七六）四条の茶屋：四条通は京都市の東西通りの一つ。八坂神社から松尾大社に至る。江戸時代には祇園町が開かれた。ここでは祇園の茶屋と考えられる。

（一七七）桂河：桂川。京都市西部を流れる川。大堰川が京都市に流入して淀川に合流するまでの部分。

（一七八）まつの尾の神：梅津の西にある松尾社。歌枕。次の和歌は「ちはやぶる松の尾山の陰見ればけふぞちとせのはじめなりける」（一条院　後拾遺）を踏まえている。

（一七九）しらゆふ：白木綿。楮の皮から採れる繊維で作り、幣帛や注連縄に用いる。ここでは白く咲き揃ったウツギの枝を幣帛に見立てている。

（一八〇）虚空蔵といへる寺：智恵山法輪寺。本尊が虚空蔵菩薩であるため虚空蔵寺と俗称される。

（一八一）嵐山：京都市右京区にある山。紅葉、桜の名所。歌枕。

（一八二）大井川：大堰川。桂川の上流部。現在では亀岡盆地から上流を呼ぶことが多い。亀岡盆地から下流は保津川、京都市渡月橋を過ぎると桂川と呼ばれる。

（一八三）渡月橋：嵐山の麓、大堰川にかかる橋。

（一八四）社：こそ。

（一八五）けおされて：気負されて。圧倒されての意。

（一八六）はびなくおもひて：本意なく思ひて。

（一八七）大苦川：現地名不明。大井川（大堰川）か。

（一八八）おはしま：おばしま。欄干。

（一八九）興：興趣のわくままに行動すること。晋の王徽之の故事に出来。

（一九〇）杜遊：さかんな遊び。歌遊。主に文雅な遊びに用いる。

（一九一）河辺：河の北。本来は黄河の北（河北）を指すが、ここでは桂川の北側の岸。

（一九二）大家汀：大堰川の汀。

（一九三）天龍：天竜寺。

（一九四）造英：さもあらばあれ。

（一九五）分百歌：小倉百人一首を撰んだことを指す。

（一九六）古山荘：小倉百人一首は小倉山荘色紙和歌とも呼ばれ、藤原定家が小倉山の山荘で撰んだとされる。この故事を踏まえており、時雨の森を指す。

（一九七）天龍寺：天竜寺。京都五山の一つ。京都市右京区嵯峨にある臨済宗の古刹。山号は霊亀山。夢窓国師の開山。

（一九八）芹川：京都市右京区嵯峨天竜寺の東側を流れる川。現在の瀬戸川。

（一九九）野の宮：京都市右京区嵯峨天竜寺野々宮町。野宮（斎院）の旧跡がある。

(二〇〇) 小倉山：京都市右京区保津川渓谷の出口付近の東岸にある山。嵯峨山と対をなし、紅葉の名所。
(二〇一) 二尊寺：二尊院。京都市右京区嵯峨にある寺。天台宗。山号は小倉山。嵯峨天皇の勅願による建立。
(二〇二) 定家殿：藤原定家。殿をつけて呼んでいる点に注意。
(二〇三) 時雨の亭（しぐれのちん）：定家閑居の住まい。京都市右京区嵯峨小倉山の麓にあったと伝えられる。
(二〇四) 名社の潮：歌枕。名古曽滝（五所明神の北）。「滝の音は絶へて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」（大納言忠房集）の本歌取り。
(二〇五) 大澤の池：京都市右京区嵯峨大沢、旧大覚寺境内にある池。
(二〇六) あやめ：「文目」と「菖蒲」の掛詞。
(二〇七) 嵯峨野：京都市右京区嵯峨付近一帯。秋草や虫の名所。
(二〇八) 鏡澤の池：京都市右京区嵯峨広沢にある。観月、観桜の名所。祠庭西湖を模して開かれた。
(二〇九) なを廣澤：「なお広い」と「廣沢」池を掛けている。風で浮草が吹き寄せられてもまだ水面が大きいという意カ。
(二一〇) 千世のふる路：嵯峨にあった旧道で、かって天皇行幸が行われた。「嵯峨の山みゆき絶えにし芹川の千代の古道跡はありけり」（業平後撰集）
(二一一) 御室の御所：仁和寺の別称。京都市右京区御室。
(二一二) 朱雀：京都市朱雀。
(二一三) 戌の刻：午後八時。午前六時から十四時間見物したことになる。
(二一四) 八日：陽暦六月二日。
(二一五) まふのぼり：参上る。
(二一六) さゝなんとたふへ：酒なんど賜べ。

(二一七) 伏：陰暦六月の節。伏日：盛夏の日。
(二一八) 荻：水辺に自生する草の類。
(二一九) 淵：みぎわ。
(二二〇) 九日：陽暦六月三日。
(二二一) 十日：陽暦六月四日。
(二二二) あち川：安治（あじ）川。大阪港に注ぐ。
(二二三) うみ渡る：「海を渡る」をかける。
(二二四) 他に日たけぬ：徒に日長けぬ。何もしない内に日盛りになる。
(二二五) 十一日：陽暦六月五日。
(二二六) 十二日：陽暦六月六日。
(二二七) には：庭。平らな海面の意。
(二二八) 尼崎：兵庫県尼崎市。
(二二九) 西宮：兵庫県西宮市。
(二三〇) いくた：神戸市生田区。
(二三一) 二度山：鵄度山（神戸市）。六甲の一部。
(二三二) 須磨：神戸市須磨区。
(二三三) わきて：別きて、とりわけ。
(二三四) 見るめ：見た様子、景色。
(二三五) 明石：兵庫県明石市。

（二三六）藻しほ草：藻塩を採取するために用いる海草。
（二三七）蜘蛛：アララギで作った網。
（二三八）午ひつしの方：北北東。
（二三九）猟：あま、海士。
（二四〇）いとなき：暇なき（せわしない）、と釣りの糸をかけている。
（二四一）よそ目：外見。
（二四二）あハれ：趣がある。
（二四三）一の谷：神戸市須磨区。源平の古戦場。
（二四四）飢饉：気の盛んなこと。
（二四五）李廣：漢の将軍。匈奴の大軍を度々打ち破ったため、匈奴から飛将軍とよばれて恐れられた。
（二四六）賀烏：チョウセンウグイスやウグイス。
（二四七）旆：黒地に様々の絹の縁飾りをつけ、末端を二分したもの。大将の印。賀烏旆によって源氏方を示そうとしたらしいが、その謂れは不詳。
（二四八）裙：裳裾、肌着。赤裙裾によって入水した平家方の女房を暗示している。
（二四九）飛将軍：漢王朝の李廣を指す。
（二五〇）絵しま：絵島、淡路島北東の小島名。記紀神話にあるオノコロジマ「胞島」に由来。歌枕。
（二五一）ゑし：絵師。
（二五二）絵しま：「得じ」と「絵島」をかける。
（二五三）此湊：岩屋港とみられる。

（二五四）十三日：陽暦六月七日。
（二五五）たつ：現地名不詳。
（二五六）巳の刻：午前十時。
（二五七）うし窓：岡山県邑久郡牛窓。
（二五八）うし窓：「憂し」と「牛窓」をかける。
（二五九）蟹ホウ：小船。
（二六〇）犯牛港：牛窓の港に侵港したことを指す。
（二六一）十四日：陽暦六月八日。
（二六二）下ッひ：岡山県倉敷市下津井
（二六三）白石：岡山県笠岡市白石島。歌枕。「波たちてかくとばかりは聞こゆれどかへるも見えず沖つしら石」（頭仲卿　堀河院一郎百首）。
「とへかしな沖のしら石しらずとも物おもふ舟のなきこがるるを」（後頼朝臣　夫木抄）。
（二六四）戌の刻：午後8時。
（二六五）弓削：愛媛県越智郡弓削町。
（二六六）くしき：くるしきノ意カ。
（二六七）うき寝：（船で）「浮き」と「憂き」をかける。
（二六八）十五日：陽暦六月九日。
（二六九）いとひなく：厭わずに。
（二七〇）かこ：水夫、船を漕ぐ人。
（二七一）ろふたけ：労たけ、苦しげ。

(二七二) 御手洗：広島県豊田郡大崎下島にある港。
(二七三) 苔：苔枕（旅寝で用いる枕）と波枕をかけた表現。
(二七四) 十六日：陽暦六月十日。
(二七五) いつき舞（斎舞）：安芸舞
(二七六) さかしき：険しい。
(二七七) 高濱：愛媛県高濱市。
(二七八) 十七日：陽暦六月十一日。同日の御金所日記（寛政九年五月）に次の記述がある。

十七日　晴

一　昨十六日御供岡田長兵衛小倉五郎八方ゟ之書状箱讃州高濱ゟ御早船登越候午ノ半刻着

是

若殿様去ル十二日大坂川口御出帆御船中益御機嫌好昨十六日高濱江被遊御船繋候由申来

一　今未刻御船被為見候段遠見番所ゟ告来

一　右ニ付何茂方ゟ為伺機嫌志賀文蔵差上候

一　御供岡田長兵衛小倉五郎八方ゟ之書状箱左志生早船ニ而登越

申ノ半刻着

一　若殿様益御機嫌好今暁高濱御出船無御滞御凌潮左志生江被遊御着船明朝五時四ッ時迄内可遊御着城之旨申来

一　左志生御船繋之所迄村瀬豊右ニ門迄遣候

是

若殿様今度初而御着城ニ付取計方之儀御供両人方迄申遣候付而也

(二七九) 長濱：愛媛県長浜市。
(二八〇) 琥珀舞：伊予舞の古称。
(二八一) 蜻珠（ひんしゅ）：ドブガイの中にできる珠。
(二八二) 蹬艘：蹬窓。小船の窓。
(二八三) ひつしの刻：午後2時。
(二八四) 佐志生：大分県佐賀関町佐志生。
(二八五) 城：臼杵城。
(二八六) 船あかり：船上がり、上陸。
(二八七) 十八日：陽暦六月十二日。
(二八八) 卯の刻：午前6時
(二八九) 殿ケはへ（殿ケ浦）：左志生と臼杵のほぼ中間にある岬。幕末には砲台が築かれた。
(二九〇) 神山記：神仙記（道教の経典）か。ここでは江戸で得た和歌の免許（ひ可り有玉能言の葉）あるいは歌学書に照応していると思われる。
(二九一) 蓬瀛：中国で渤海東方にあると信じられた五神山のうちの蓬洲と瀛洲。
(二九二) 鍔（ゲキ）：船首の飾り。
(二九三) 王母：実母を西王母に擬している。
(二九四) 洲崎：現在の臼杵市役所付近。当時は船着き場。
(二九五) 凌虚亭：建造物と思われるが不詳。
(二九六) 凌虚：凌虚亭に対応する。
(二九七) 金鶏亭：臼杵城が「鶴ケ城」、「白鶴城」と呼ばれたことからの連想か。

参考文献

池田弥三郎他監修、鈴木棠三他編：日本名所風俗図会。全一八巻十二別巻。角川書店。昭和五八年。

稲葉家譜：臼杵市・歴史資料館。

臼杵市史編纂室（編）臼杵市史（上巻）。臼杵市、平成二年。

うすきかたりべの会（編）うすきみちしるべ。臼杵市。平成二年。

温故年表録：臼杵市・歴史史料館。

片桐洋一：歌枕歌ことば辞典増訂版。平成十年。

金井弘夫：新日本地名索引。アポック社出版局。平成五年。

岸　鴻子（訳）：中国の思想Ⅶ　荘子。徳間書店。平成八年。

澤田久雄編：日本地名大辞典。全六巻。昭和一三年（復刻：日本図書センター、平成八年）。

司馬　遷：史記　李将軍列伝。田中謙二、一海知義訳注　中国古典選　朝日選書一〇〇五。朝日新聞社。平成八年。

高橋長一：臼杵物語。自家出版。昭和五三年。

中村　元：佛教語辞典（縮刷版）。東京書籍。昭和五六年。

樋口芳麻呂（校注）：王朝秀歌選。岩波文庫。昭和六二年。

増村隆也：新編臼杵史。昭和三二年。

小学館国語大辞典。小学館。昭和五六年

東海道名所図絵（上中下）、ぺりかん社。平成十三年。

（大分県挟間町医大ヶ丘二丁目一番地　医大宿舎六―一〇六）